

シニアネットワークの情報活用実践力 —岩手県内のシニアネット会員を対象とする調査結果を通して—

小川 晃子

Notes on Skills of Practical Use of Information in Senior Net Workers

Akiko OGAWA

A questionnaire including a scale to measure the skills of practical use of information which basically based on Takahira et al. (2001) was administrated to 261 senior net workers in Iwate prefecture. Four factors, positive attitude to informational activities, active strategy, information seeking, and informational confirmation, were emerged through factor analysis on this scale. Among four factors, the first factor seemed critical to progress of IT activities in the seniors, which was slightly different to the young. The scores of this scale were positively related to subjective evaluation on spending hours to IT activities than objective hours of this activities.

はじめに

日本のインターネットの利用率は増加を続けており、情報通信白書（総務省，2003）によれば、平成15年度末には人口普及率がはじめて60.5%を超えたと報告されている。しかし、世代・性・世帯主年収・都市規模といった要因によるインターネット利用率の格差は依然存在しており、その中で最も大きな要因は世代である。平成15年末の調査結果では、60歳未満はいずれの世代も50%以上の利用率であるが、60歳以上では16.2%と利用率は大幅に減少する（総務省情報通信政策局，2004，35-37）。中高年層の情報格差（デジタルデバイド）の解消は現代の社会的課題となっている。

中高年の情報格差解消に取り組む自助的な活動の1つが、いわゆるシニアネットである。一般にシニアネットは、シニア、すなわち中高年向けのパソコン通信やその利用を指すが、その活動を行っている団体の名称

でもある（郵政省通信政策局，1998）。米国のシニアネットは1986年に発足し、現在では全米とカナダなどの海外をあわせて約240箇所の学習センターを運営するとともに、会員がオンラインで交流できるようサイトを運営する教育目的の非営利団体である（SeniaNet，2004）。日本では1994年に京都で金曜サロンが、1998年に仙台シニアネットクラブやシニアネット久留米が発足するなど、90年代半ばから地域ごとにシニアネットと称する団体が設立されてきた。岩手県内においては、シニアネット・リアスが1999年に発足して以来、現在までに9つの団体が設立され活動を続けている。

米国シニアネットをはじめとしてシニアネットの設立・運営には社会老年学などの研究者が関与している事例が多く、日本でも金曜サロンを設立した吉田敦也（1998）は教育工学、シニアネット仙台の理事長の大内秀明（2003）は経済学の研究者であり、それぞれの分野

でシニアネットの活動を研究している。しかし、日本におけるシニアネット研究は、生涯学習や地域活性化の面からその活動効果を検証する研究はあるが、シニアネットが個々の中高年の情報活用能力を高めていることや、個々人の情報活用能力の構造を明らかにした研究は乏しい。

情報活用能力は、「情報及び情報手段を主体的に選択していくための個人の基礎的な資質」（文部省、1992）と定義されている。この点については、1998年に文部省により情報教育の新たな枠組みが提示され、より具体的・包括的なものへと修正が加えられた。新たな定義においては、情報活用能力は3つの下位成分、①情報活用の実践力（課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することも含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力）、②情報の科学的な理解、③情報社会に参画する態度から構成されている。この枠組みが提示された後に、高比良・坂元ほか（2001）はこのうちの①情報活用の実践力に焦点をあて、中学生から大学生を対象とした調査を実施し、情報活用の実践力を測定するための尺度を作成している。本研究では、既に信頼性・妥当性が検討されている高比良・坂元らの尺度を手がかりに新たに開発した

尺度を用いてシニアネット会員（以下「シニアネットワークワーカー」という）の情報活用実践力を測定し、その構造やインターネット利用との関連を検討することで、今後の中高年の情報活用実践力の尺度作成などに資することを目的としている。

方 法

1. 調査方法

調査対象者は、2004年10月現在に岩手県内にある全てのシニアネット9団体に所属する満50歳以上の会員である。2004年10月にシニアネット事務局を通して調査票を配布し、回収はシニアネット事務局における一括回収と、郵送回収を併用した。有効回収は261件で、有効回収率は30.5%であった（表1）が、本研究では満50歳以上で岩手県内のシニアネットの会員である258名（男132名、女125名、無回答1名）をシニアネットワークワーカーとして分析の対象とした。

2. 調査項目

1) 情報活用実践力

情報活用実践力の測定には、高比良・坂元ほか（2001）によって開発された情報活用の実践力尺度の

表1 岩手県内シニアネットの会員数・今回調査の回答者数

シニアネット名	会 員 数	有効回収数	回 答 率
いわてシニアネット	218	39	17.9
アテルイシニアネット	147	32	21.8
花巻シニアネット	120	39	32.5
シニアネット・リアス釜石	103	32	31.1
シニアネット・リアス高田	120	44	36.7
シニアネット・リアス大船渡	95	53	55.8
シニアネット・リアス大槌	20	8	40.0
やまだシニアネット	23	7	30.4
シニアネット久慈	10	7	70.0
合 計	856名	261名	30.5%

一部を用いた。高比良・坂元らが開発した実践力尺度は、情報活用の実践力という上位概念のもとに収集力、判断力、表現力、処理力、創造力、発信・伝達力という6つの下位概念を持つモデルに沿って54項目（①収集力10項目、②判断力8項目、③表現力8項目、④処理力8項目、⑤創造力10項目、⑥発信・伝達力10項目）からなる尺度である。高比良・坂元らはこの尺

度を用いて中学生から大学生までを対象とした調査データで確認的因子分析を行い、尺度の信頼性・妥当性を確認している。さらにこの尺度は、インターネット使用量と、実践力全体と表現力を除くすべての下位尺度で正の相関があることが明らかになっている。

中高年を対象とする調査を行うにあたって本来は、信頼性・妥当性が検証されたこの尺度をそのままの形

で検証をすることが望ましいが、教室で一斉に配布・回収を行える学生対象の調査とは異なり、中高年を対象とする自記式の調査でこれほど多くの項目を設問することは困難である。そこで本研究においては、高比良・坂元らが算出している6つの下位因子から該当する各項目への因果係数の推計値が大きい項目と、尺度のワーディングが中高年の生活実感レベルで回答可能か否かという点とを併せて検討し、合計16項目（①収集力2項目、②判断力3項目、③表現力2項目、④処理力3項目、⑤創造力3項目、⑥発信・伝達力3項目）を選択した。これに、高齢者の生活実感レベルを考慮

した新たな2項目（①収集力1項目、③表現力1項目）を加え、合計18項目からなる尺度とした（表2）。各項目においては、1.非常にあてはまる、2.どちらかといえばあてはまる、3.どちらともいえない、4.どちらかといえばあてはまらない、5.まったくあてはまらない、の5件法を用いた。

2) インターネット利用実態

インターネットの利用実態は、(1)1日あたりの使用時間と(2)同年代の人に比較した使用量の2点についていずれも自己判定の回答を得た。2点とも、①電子

表2 情報活用の実践力尺度の項目

項		目	各項目に対する因果係数の推計値
①収集力	1	わからないカナ文字などがあつたら、辞書や辞典をひくようにしている	0.52
	2	自分から進んで調べものをするのは少ない※	0.64
	3	医療や福祉など生活上必要な事柄については、徹底的に情報を集める	(今回作成)
②判断力	4	テレビで知ったことを、後から本などで確認することがある	0.42
	5	噂を聞いたときには、それがどのくらい根拠があるかを確認している	0.56
	6	たくさんの資料から必要な情報を見つけだすのは苦手である※	0.52
③表現力	7	調べたことを整理するとき、文章だけでなく図や表も活用するよう心がけている	0.64
	8	家計簿やノートなどがわかりやすいといわれる	(今回作成)
	9	集めた資料を整理するのは苦手である※	0.55
④処理力	10	多くの資料を検討して、結論を導くのは得意である	0.71
	11	意見がたくさんあっても、うまくまとめることができる	0.65
	12	長い文章でも、その要点はたいてい把握できる	0.63
⑤創造力	13	人と違った意見を考えるのは苦手である※	0.66
	14	新しいものや変わったものを作り出すのは苦手である※	0.47
	15	自分なりの考えをもつようになっている	0.63
⑥発信・伝達力	16	相手の反応に気を配りながら話すほうである	0.39
	17	大勢の前で発表するときは、内容を整理してから話すようになっている	0.61
	18	わかりやすい文章を書くのは苦手である※	0.53

注1) ※は逆転項目。

注2) 各項目における因果係数の推計値は、先行研究（高比良・坂元ほか、2001）の因果係数の推定値。因果係数は全て $p < 0.01$ 。

メールの読み書き、②フォーラム・掲示板の読み書き、③チャットの読み書き、④Webサイト閲覧、⑤HP作成の5項目それぞれについて回答を得た。(1)1日あたりの使用時間は、1.全くしない、2.15分未満、3.15～30分未満、4.30分～1時間未満、5.1時間～2時間未満、6.2時間～3時間未満、7.3時間以上、の7件法を用いた。(2)同年代の人に比較した使用量についての自己判定は、1.非常に多い、2.どちらかといえば多い、3.普通、4.どちらかといえば少ない、5.非常に少ない、の5件法を用いた。

3. 分析方法

1) 情報活用実践力の点数化

情報活用の度合いが高いほど点数が多くなるように18項目それぞれに1点から5点の点数を与えた。無回答は各項目の得点化から除いた。情報活用の実践力を上位概念とする下位概念である6項目（①収集力、②判断力、③表現力、④処理力、⑤創造力、⑥発信・伝達力）ごとの点数（3点から15点）と総計点（6点から30点）を算出した。

2) インターネット利用実態の点数化

両設問とも、使用量が多いほど点数が多くなるように尺度に点数を与えた。無回答は各項目の得点化から除いた。各項目の点数は(1)1日あたりの使用時間が1点から7点、(2)同年代の人に比較した使用量についての自己判定は1点から5点となる。5項目の得点を合計した総計点は、(1)は5点から35点、(2)は5点から25点になる。

結 果

1. シニアネットワーカーの基本的属性

表3に示すように、シニアネットワーカーの年齢は最高年齢が88歳となっており、平均年齢は66.3歳(SD=5.93)である。男女はほぼ半々であった。最終学歴は「高校(旧制中学校、実業学校、師範学校、女学校含む)」が約6割を占めていた。現在「有職」は、「フルタイム」(3.9%)と「非常勤・パート等」(10.1%)を合計して14.0%であるのに対し、「無職」は「専業主婦」(22.9%)を加えて74.1%となっている。62.0%が「定年を経験」している。定年を経験した場合には定年直前の職種を、定年を経験していない場合には最も長く働いた職種を回答してもらったところ、「専門技術職」が24.8%で最も多く、「管理職」(16.3%)と「事務職」(16.3%)が続いている。これに「会社団体役員」(5.0%)を加えると約6割がいわゆるホワイトカラー層である。

2. インターネット利用実態

インターネットの利用実態を得点化した結果は、(1)1日あたりの使用時間の総計点が平均10.20点(SD=4.90)、(2)同世代の人に比較した使用量について

表3 シニアネットワーカーの基本的属性

平均年齢	66.3 (SD=5.93)	
年齢		
50～59歳	27	10.5%
60～64歳	76	29.5
65～69歳	81	31.4
70～79歳	66	25.6
80～88歳	5	8.6
性別		
男性	132人	51.2
女性	125	48.4
最終学歴		
中学(旧制高等小学校含む)	32	12.4
高校(旧制中学・女学校含む)	155	60.1
短大・高専・旧制高校	30	11.6
大学・大学院	38	14.7
現在の仕事		
有職(フルタイム)	10	3.9
有職(非常勤・パート等)	26	10.1
専業主婦	59	22.9
それ以外の無職	132	51.2
その他	30	11.6
定年の経験		
有り	160	62.0
無し	86	33.3
定年前・長く働いた職種		
会社団体役員	13	5.0
自営業主	9	3.5
自由業	1	0.4
専門技術職	64	24.8
管理職	42	16.3
事務職	42	16.3
販売・サービス職	11	4.3
技能・労務職	24	9.3
保安職	1	0.4
農林漁業	8	3.1
その他の仕事	15	5.8
働いたことはない	5	1.9

表4 インターネット使用量の尺度得点

インターネット使用		①電子メールの読み書き	②フォーラム・掲示板の読み書き	③チャットの読み書き	④Webサイト閲覧	⑤HP作成	総計点
1日あたりの使用時間	度数	238	229	222	226	220	213
	平均値	2.71	2.01	1.44	2.70	1.61	10.20
	標準偏差	1.40	1.32	0.96	1.68	1.28	4.90
同世代の人に比較した自己判定の使用量	度数	239	224	222	224	221	214
	平均値	2.80	2.05	1.55	2.46	1.60	10.40
	標準偏差	1.36	1.14	0.88	1.31	1.00	4.41

の自己判定の総計点が平均10.40点(SD=4.41)であった。5項目の平均点を比較すると、(1)(2)ともに③チャットの読み書きが他項目より低くなっている(表4)。5項目と総計点の相関はいずれも高く、5項目それぞれの間の相関も、Webサイト閲覧とチャットの読み書きの相関以外は全般的に高い結果となった(表5)。

それぞれの α 係数を求めると、(1)1日あたりの使用時間が $\alpha = .794$ 、(2)同世代の人に比較した使用量の自己判定が $\alpha = .834$ であることから、情報活用能力との関連を分析するにはより信頼性の高い(2)同世代に比較した使用量の自己判定を用いることとした。

表5 インターネット使用量の項目間の相関係数(r)

	1日あたりの使用時間					同世代に比較した使用量の自己判定					
	電子メール	フォーラム・ 掲示板	チャット	Webサイト	HP作成	総計点	電子メール	フォーラム・ 掲示板	チャット	Webサイト	HP作成
1日の 使用時間	電子メール	0.535***									
	フォーラム・ 掲示板		0.280***	0.482***							
	チャット			0.558***	0.502***	0.284***					
	Webサイト				0.297***	0.587***	0.440***	0.483***			
	HP作成					0.729***	0.809***	0.601***	0.807***	0.743***	
同世代 比較自己 判定	電子メール	0.669***	0.441***	0.155*	0.500***	0.262**	0.570***				
	フォーラム・ 掲示板	0.373***	0.621***	0.293***	0.391***	0.438***	0.572***	0.596***			
	チャット	0.267**	0.399***	0.538***	0.235***	0.286***	0.418***	0.335***	0.580		
	Webサイト	0.509***	0.385***	0.127	0.741***	0.283***	0.623***	0.629***	0.527***	0.343***	
	HP作成	0.214*	0.409***	0.284***	0.335***	0.681***	0.532***	0.369***	0.575***	0.563***	0.430***
総計点	0.550***	0.583***	0.318**	0.598***	0.511***	0.714***	0.804***	0.841***	0.687***	0.797***	0.733***

注) * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

表6 情報活用の実践力尺度の統計値

	収集力	判断力	表現力	処理力	創造力	伝達力	総計点
度数							
有効	230	238	225	234	230	240	207
欠損値	28	20	33	24	28	18	51
平均値	10.14	8.97	8.68	9.13	10.13	10.33	57.21
中央値	10.00	9.00	9.00	9.00	10.00	10.00	58.00
標準偏差	2.01	2.19	2.25	2.44	2.02	1.91	9.13
最小値	3	3	3	3	4	4	25
最大値	15	15	14	15	15	15	80

3. 情報活用実践力

1) 尺度の得点と相関

情報活用の実践力を、高比良・坂元らが作成した尺度の6つの下位概念に対応する下位尺度ごとの点数とその総計点の結果を示したのが表6である。表現力の平均点が8.68(SD=2.25)で他尺度より低く、伝達力が10.33(SD=10.33)で他尺度より高い。下位尺度間の相関は、判断力と収集力(0.515)、及び発信・伝達力と処理力(0.541)で高くなっている。また総計点と各尺度間の相関はいずれも高い(表7)。

2) 尺度の得点とインターネット利用実態の関連

下位尺度ごとの得点とインターネットの使用量(使用時間・同世代に比較した使用量の自己判定)の相関係数を表8に示した。情報活用の実践力の総計点と、インターネット使用量の2項目の総計点は、いずれも正の相関が見られた。また、情報活用の総計点及び下位尺度のすべてが、同世代に比較したインターネット使用量自己判定の総計点と正の相関がみられた。1日あたりのインターネットの使用時間より、同世代に比較した使用量自己判定の方が、情報活用の実践力全体

表7 「情報活用の実践力」下位尺度間の相関係数 (r)

	収 集 力	判 断 力	表 現 力	処 理 力	創 造 力	発 信 ・ 伝 達
収 集 力						
判 断 力	0.515***					
表 現 力	0.308***	0.497***				
処 理 力	0.368***	0.453***	0.456***			
創 造 力	0.282***	0.361***	0.437***	0.466***		
発 信 ・ 伝 達 力	0.267***	0.228***	0.267***	0.541***	0.428***	
総 計 点	0.660***	0.744***	0.722***	0.789***	0.702***	0.638***

注) *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

表8 「情報活用の実践力」下位尺度とインターネット使用量の相関係数 (r)

		インターネット使用量											
		1日あたりの使用時間					同世代に比較した使用量の自己判定						
		電子メール	フォーラム・チャット	Webサイト	HP作成	総計点	電子メール	フォーラム・チャット	Webサイト	HP作成	総計点		
情報活用の実践力	収 集 力	0.144*	0.090	-0.043	0.123	-0.012	0.078	0.252***	0.166*	0.106	0.222***	0.039***	0.201***
	判 断 力	0.246***	0.193**	0.155*	0.214**	0.069	0.237***	0.271***	0.229***	0.322***	0.276***	0.200**	0.325***
	表 現 力	0.139*	0.198**	0.207**	0.232***	0.152*	0.244***	0.181**	0.214**	0.271***	0.250***	0.183**	0.287***
	処 理 力	0.220***	0.186**	0.113	0.157*	0.054	0.206**	0.350***	0.296***	0.236***	0.286***	0.166*	0.341***
	創 造 力	0.228***	0.147*	0.100	0.172*	0.048	0.205**	0.301***	0.215***	0.150*	0.232***	0.068	0.262***
	発 信 ・ 伝 達 力	0.159*	0.124	-0.020	0.024	0.039	0.109	0.289***	0.160*	0.080	0.098***	0.066	0.185**
	総 計 点	0.262**	0.203**	0.112	0.197**	0.075	0.233**	0.371**	0.287**	0.262**	0.298*	0.155*	0.364**

注) *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

と下位尺度のいずれとも相関が高い。全体的にプラスの有意の相関がみられるなかで、収集力や発信・伝達力では、こうした関係はみられず、使用量の自己判定とも発信・伝達力でプラスの有意の関係は少なかった。

3) 因子分析の結果

情報活用の実践力の構造を検討するために、18項目の探索的因子分析(主成分分析・バリマックス回転)を実施した。4つの成分が得られ、第4因子までの累積寄与率は55.7%を示した。それぞれ因子負荷が高い項目をみると、高比良・坂元らが高校生のデータによって分析した情報活用の実践力の下位概念とは異なる構造になっている(表8)。第1因子で因子負荷の高い項目はすべて反転項目であるため、「苦手意識なし型」と命名した。第2因子は発信・伝達力の2項目と処理力の3項目の因子負荷が高いことから、「処理・発信型」とした。同様に因子負荷量の多い項目群の内容から、第3因子は「リサーチ表現型」、第4因

子は「確認型」と命名した。

因子分析の結果得られた4つの因子について、おのおの因子負荷量が多い項目について尺度得点を算出し、その尺度の内的整合性を確認するために α 係数を算出し、尺度としての信頼性を検討した。その結果は表9に記した通りで、第1因子から第3因子まではある程度の安定性が示された(.683~.775)が、第4因子の α 係数は低い(項目点が少ないためといえる)。

4) 因子分析の結果とインターネットの使用量

因子分析の結果得られた4つの成分ごとの因子得点とインターネットの使用量の相関係数を表10に示した。第1因子はインターネットの使用量のいずれの項目とも有意な相関がないのに対し、第2・第3因子は有意の正の相関関係がみられた。特に第3因子は相対的に強い相関があり、同世代に比較した使用量の自己判定の全ての項目及び総計点と有意な正の相関がみられた。

表9 「情報活用の実践力」の因子分析の結果

因子の命名	「情報活用の実践力」の下位概念	項目	因子負荷量				
			F 1	F 2	F 3	F 4	共通性
苦手意識なし型 ($\alpha = .775$)	創造力	新しいものや変わったものを作り出すのは苦手である※	0.7896	0.1338	0.0664	0.0873	0.6534
	創造力	人と違った意見を考えるのは苦手である※	0.7291	0.0568	0.0299	0.1409	0.5556
	判断力	たくさんの資料から必要な情報を見つけ出すのは苦手である※	0.7058	-0.0068	0.2205	-0.2047	0.5887
	発信・伝達力	わかりやすい文章を書くのは苦手である※	0.6807	0.2600	-0.1179	0.1218	0.5597
	表現力	集めた資料を整理するのは苦手である※	0.5858	-0.1406	0.1890	-0.2229	0.4484
	収集力	自分から進んで調べものをするのは少ない※	0.4762	0.1120	0.0502	-0.3468	0.3621
処理・発信型 ($\alpha = .775$)	発信・伝達力	大勢の前で発表するときは、内容を整理してから話すようにしている	0.0919	0.7182	0.1063	0.0301	0.5365
	処理力	長い文章でも、その要点はたいてい把握できる	0.2344	0.7141	0.1940	-0.0282	0.6033
	処理力	意見がたくさんあっても、うまくまとめることができる	0.2963	0.6871	0.3786	-0.0160	0.7035
	創造力	自分なりの考えをもつようにしている	-0.0376	0.6553	0.1809	0.1357	0.4819
	発信・伝達力	相手の反応に気を配りながら話すほうである	-0.2176	0.6011	-0.1149	0.2754	0.4977
	処理力	多くの資料を検討して、結論を導くのは得意である	0.3088	0.5300	0.4954	-0.0470	0.6240
リサーチ表現型 ($\alpha = .683$)	判断力	噂を聞いたときには、それがどのくらい根拠があるかを確認している	-0.1407	0.1004	0.7753	0.1830	0.6644
	表現力	家計簿やノートなどがわかりやすいといわれる*	0.1840	0.1942	0.6498	-0.1230	0.5089
	収集力	医療や福祉など生活上必要な事柄については、徹底的に情報を集める*	0.0236	0.0968	0.6127	0.4796	0.6154
	表現力	調べたことを整理するとき、文章だけでなく図や表も活用するよう心がけている	0.2058	0.1502	0.6036	0.0937	0.4380
確認型 ($\alpha = .490$)	収集力	わからないカナ文字などがあつたら、辞書や辞典をひくようにしている	-0.0006	0.0989	0.0875	0.7877	0.6378
	判断力	テレビで知ったことを、後から本などで確認することがある	-0.0138	0.2015	0.4421	0.5521	0.5410
固有値			3.08	2.82	2.56	1.57	
寄与率 (%)			17.1	15.7	14.2	8.7	(55.7%)

注1) 主成分分析、バリマックス回転。

注2) α 値はCronbachの係数。

注3) ※は逆転項目、*は高比良たちが作成した尺度ではなく今回新規に加えた項目。

表10 「情報活用の実践力」因子得点とインターネット使用量の相関係数 (r)

		インターネット使用量											
		1日あたりの使用時間					同世代に比較した使用量の自己判定						
		電子メール	フォーラム・チャット 掲示板	Webサイト	HP作成	総計点	電子メール	フォーラム・チャット 掲示板	Webサイト	HP作成	総計点		
情報活用の実践力	第1因子(苦手意識なし)	0.054	0.046	0.087	0.100	0.056	0.085	0.120	0.117	0.096	0.118	0.020	0.136
	第2因子(処理・発信型)	0.160*	0.132	-0.016	0.020	-0.018	0.096	0.328***	0.205**	0.076	0.130	0.035	0.218**
	第3因子(リサーチ表現)	0.229**	0.195**	0.177*	0.271***	0.126	0.276***	0.233**	0.209**	0.302***	0.360***	0.251***	0.350***
	第4因子(確認型)	0.072	-0.035	-0.088	-0.125	-0.051	0.085	-0.013	0.000	0.032	-0.175*	-0.032	-0.060

注) * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$.

考 察

高比良・坂元ほか(2001)が青少年に対する調査をもとに開発した情報活用の実践力尺度は、情報活用の実践力という上位概念のもとに、収集力、判断力、表現力、創造力、発信・伝達力という6つの下位概念を持つモデルに沿って構成されている。今回このモデルに

即して高齢者向きに開発した尺度を用いての調査において、この6つの下位モデルごとに求めた得点は、インターネット使用量と全般的に有意な正の相関がみられた。このことは、中学生から高校生までを対象とした調査によってインターネット使用量と有意な正の相関がみられた高比良・坂元らの先行研究と概ね一致する結果である。下位尺度のなかでは、発信・伝達力が

他の尺度に比較しインターネットの使用量との有意な相関がみられないという点も、同様の結果となっている。これは、高比良・坂元らが情報活用の実践力として作成した尺度の構成概念が、インターネット使用という場面における実践力としては、青少年だけではなく中高年まで年代を拡張しても妥当性を持つことを支持する結果だといえる。

しかし、今回の調査結果を因子分析した結果把握された因子構造は、高比良・坂元らの先行研究の因子構造モデルとは異なる結果となった。第2因子の「処理・発信型」は、先行研究における情報活用の実践力の下位概念である処理力と発信・伝達力で、第3因子の「リサーチ表現型」は判断力と表現力でそれぞれ構成されており、先行研究における因子構造モデルとの類似性を示しているのに対し、第1因子である「苦手意識なし型」は先行研究の因子モデルとは異なるものである。第1因子の因子負荷量が高い項目は「苦手である」とのワーディングを含む反転項目である。他世代に比較しインターネット利用に対して積極的な姿勢をもつことができない中高年が多いなかで、苦手意識がないことが情報活用の実践力を判別する下位概念として最も大きなものであることを今回の結果は示している。しかし、そもそもシニアネットワークワーカーは同世代のなかではインターネットへの苦手意識が少ない突出した層であると考えられることから、中高年全体でこのような傾向があるか否かはシニアネットワークワーカー以外の中高年を対象とした調査による今後の検証が必要である。また、反転項目のワーディングを変えてさらなる検証を重ねることが課題である。

今回の調査においてはインターネットの使用量について2つの測面から測定したが、1日の使用時間という数量よりも、同世代と比較した使用量の自己判定というより主観的な量の方が、先行研究に基づく情報活用の実践力の下位概念6項目、及び今回因子分析を行った結果である因子得点のいずれとも、より強い正の相関を示していた。この結果がシニアネットワークワーカーにみられる特徴であるか否かは、今回の調査結果だけでは判断できない。しかし、高比良・坂元らの先行研究では、青少年のインターネット使用量を「授業以外（家など）」という限定をつけて測定しているが、授業でインターネットやコンピュータの利用が多い工業科等の生徒と利用が少ない学科の生徒の間で比較したところ前者の方が情報活用の各下位能力とも

に高いことが示されている。高比良・坂元らはこのことをインターネット使用量による差と解釈しているが、工業高校などでは授業でインターネットを多く活用することによる同世代への心理的な優位性が影響している可能性も考えられる。インターネットの使用量を測定する尺度についても、今後の詳細な検討が必要である。

ま と め

本研究では岩手県内のシニアネットワークワーカーを対象として、青少年を対象とする調査によって開発された高比良・坂元ほか(2001)をモデルに開発した尺度を用いて情報活用実践力を測定し、その構造やインターネット利用との関連について検討を行った。その結果、シニアネットワークワーカーの情報活用の実践力の構造は先行研究のモデルとは異なり、情報活用への苦手意識の有無が大きな判別要因となることが明らかになった。また、インターネットの使用量が、1日の使用時間という数量よりも、同世代と比較した使用量の自己判定というより主観的な量の方が、情報活用の実践力と強い正の相関を示すことが明らかになった。

しかし、高齢者の情報活用能力については先行研究は少ないため、探索的な研究とならざるを得なかった。今後は、調査対象を一般の中高年に広げ、反転項目などのワーディングを変えるなど、精緻な研究を進めていくことが大きな課題である。

謝 辞

本研究の調査に協力していただきました岩手県内9つのシニアネットワーク事務局の皆様、及び会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

文 献

- 森田信治, 2001, 「シニアネットワーク金曜サロン(特集シニアネットにみる高齢者の新しい生涯学習)」『全日本社会教育連合会』56(3): 16-19.
- 檀淵めぐみ・坂元章・小林久美子ほか, 2003, 「学校におけるインターネットの活用が生徒の情報化社会レディネスに及ぼす効果—中学生を対象にした準実験による評価研究」『日本教育工学雑誌』26(4): 377-

383.

大内秀明, 2003, 「NPOは変革の主体になりうるかー
NPO法人シニアネット仙台」『総合政策論集』2(2)
: 117-136.

高比良美詠子・坂元章・森津太子ほか, 2001, 「情報
活用の実践力尺度の作成と信頼性および妥当性の検
討」『日本教育工学雑誌』24(4): 247-256.

SeniaNet, 1986, "Lerning Centers"

([http://www.seniornet.org/php/default.php?page ID:
5321](http://www.seniornet.org/php/default.php?page ID: 5321), 2004. 12.18)

総務省情報通信政策局, 2004, 『通信利用動向調査報
告書世帯編 (平成15年版)』

([http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/public/datas/
HR200300_u004.pdf](http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/public/datas/HR200300_u004.pdf), 2004. 4.12).

総務省, 2004, 『情報通信白書 (平成16年版)』

([http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaperja
/h16/index.htm](http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaperja/h16/index.htm), 2004. 12.12).

和気康太・茨木尚子・宮田加久子, 2004, 「高齢者に
おけるインターネット利用とソーシャル・サポート
の可能性ー仙台市のIT講習会受講者及びシニア
ネット会員に関する調査研究を通して」『明治学院
大学社会学部附属研究所年報』通号34: 257-277.

吉田敦也, 1998, 『シニアライフとパソコン』一橋出
版.

郵政省通信政策局, 1998, 「シニアネットの普及とそ
のための課題」『情報通信ジャーナル』16(8): 9-11.